

続・ 珈琲の思い出十五

「お待たせしてごめんなさい! ああ、何も飲まずに待っていらっしやっただんですか?? 先に飲んでもらって良かったのに……。遅くなって本当にごめんなさい。」

「いえいえ、では注文しに行きましょうか?」

和樹にうながされて、私たちは注文カウンターへ移動した。

「僕はカフェモカをトールで」

「私は本日のコーヒーのキリマンジャロをショートで。あ、代金は別々でお願いします。」

「優子さん、僕がドリンクは持っていきますから、先に席で待っていて下さい。」

和樹が二人分のドリンクを持って席に戻ってくると、

私は思わず自分が思っていたことを口に出してしまった。

「ありがとうございます。えーと、あの、佑樹君のお父さんのスーツ姿、初めて見ました。とっても素敵だなあ、と行って……」

「え!? 何をおっしゃいますか! 僕のほうこそ優子さんの私服姿を初めてみました。とってもかわいいなあ、と行って……」

そう言うと、私たちは急に恥ずかしくなって、お互い真っ赤になつてうつむいてしまった。なんなんだ、これは? これじゃ、まるで中学生の初デートじゃないか……。

「そうだ、優子さん、今朝の新聞見ましたよ! ほら、これ。」和樹が胸ポケットから新聞記事の切り抜きを取り出すのを見て、私は心底驚いた。そして、嬉しさと恥ずかしさでさらに顔が熱くなるのが自分でもわかった。

「ありがとうございます!! わざわざ取っておいて下さったんですか!」(続)